

宅配便で送骨広がる 高齢、経済的事情…納骨に便利

05/05 07:54 更新

墓などに納骨するため、遺骨を宅配便で送る「送骨」に対応する寺や霊園が道内でも増え始めている。「遺骨をモノ扱いしている」との批判の声がある一方で、高齢や多忙、経済的な事情などで持参するのが難しい人にとっては「切実な問題が解決できる」と好評という。

北海道中央霊園（三笠市）は2014年、送骨サービスを始めた。開設した1970年代に墓を購入した人たちが高齢になり、「伴侶を亡くしたが、納骨に行けない」という声が相次いだのがきっかけだ。

霊園側で段ボールを送り、骨つぼをガムテープや緩衝材で梱包（こんぼう）して送り返してもらう。火葬されたことを証明する書類などは別に郵送してもらう。永代供養が付いた合同墓に納骨する場合は3万9千円で、送骨の費用は無料としている。道内のほか、墓が高額で所有しづらい関東などから、送骨を活用した合同墓などへの納骨は、14年の約20件から15年には約80件、16年は約90件まで増えたという。



送骨のために用意した段ボールを手にする
北海道中央霊園の武田寛理事長

武田寛（ゆたか）理事長（55）は「予想を上回る需要があった。『けしからん』という苦情も覚悟していましたが、これまで一件もない」と話す。重い骨つぼを抱えて移動するのが大変なため、遺骨を送って後日、遺族が納骨に立ち会う場合もある。

送骨を巡っては、仏教界の一部からは「遺骨は胸に抱いて運ぶべきだ」と批判もあるが、3年前から受け付けている北海寺（札幌市中央区）の長谷川観樹住職（43）も「確かにそれは理想の形だが、家族の形が変わり、地域の縁も薄れる中、現実に管理に困っている人がいる。供養は責任を持ってさせていただく」と説明する。

送骨には、ヤマト運輸や 佐川急便 など大手宅配業者が遺骨の配送を受け付けていないため、制限していない日本郵便の「ゆうパック」が利用されている。